

寺 報



第181号

発行人

伊 勢 徳

発 行 所

真宗大谷派 称念寺

知立市新地町西新地65

TEL(0566)83-8888

FAX(0566)84-1262

www.shounenji.com

印 刷

有限会社 クシロ印刷

カイロスの尺度

かつて昭和の時代に人生60年と言われたが、現在では、厚生労働省の統計で日本人男性の平均寿命が81歳、女性は87歳となっている。私達一人ひとりの生命は、よくよく思慮すれば、心臓は自分で動かすのではなく、睡眠や目覚めも自力ではない。食べ物には選択肢があるが腹が減るのも消化も体まかせ、呼吸にしても意識すらせず、排泄や免疫等の機能に加え体中の細胞の多様な働きに至るまで徹頭徹尾、「生かされている命」である。だが無論のこと平均寿命とは、皆がそのように生き

られるのではなく、飽くまで平均的な年数に過ぎない。不意に事故や病気で早逝する運命もあれば、また早く迎えが来て欲しいと願っても寝たきりのまま生き延びもしよう。私達が何時、何処で、どのような命を終えていくのかは、これは縁に依るのだ。平均寿命の推移は、諸々の

条件が異なる過去には、例えば縄文時代の平均寿命は、驚くべきことに僅か15歳であったと云う。乳幼児の死亡率が高かったと想定されるが、長生きしたとて30年という世相であった。その後、米作りや鉄器も広まり古墳時代には平均寿命が25歳、平安時代には30歳台となる。鎌倉・室町の乱世では度重なる飢饉や疫病、天災や戦争などで低下したが、「過去帳」の故人の死亡情報からより正確に算出された江戸時代には、再び30歳台を回復している。日本に於ける平均寿命が初めて40年を超えたのが明治・大正の時期で、戦時中は再び急落するも昭和20年代には人生50年となり、世界的な長寿国となつていった。生を受けた背景は自

9月21日(日) 午前8時・10時

秋の彼岸法要

法話 佐野明弘師 (大谷専修学院院长)

分で選んだ訳ではないので、「違う時代に生まれていたら」と様々なことが想い起こされることである。ここに『絵とき・ゾウの時間とネズミの時間』(福音館書店)という絵本がある。ゾウとハツカネズミの比較がその内容となっている。体重が30グラムのハツカネズミに対し、3トンである象の体重は10万倍となるが、実は食べる量は3千倍のみに留まる。比重の割には体の表面積が小さく、また体に栄養が蓄えられるためだ。また、ネズミは生



「夏の思い出」徳風つき組 日野愛梨

私達はいつも何かを切り捨て、傷つけて、見捨てていく存在である 本多雅人

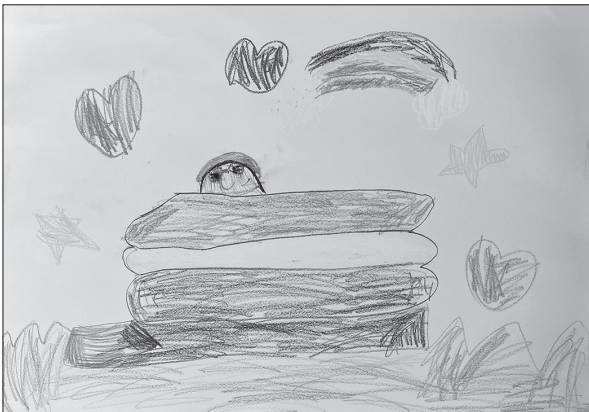
まれて3か月で大人になって、夫婦となり子どもを産み、そして数年で一生を終える。小さい動物は短い命を全速力で駆け抜ける。一方で象の寿命は約70年、大きい動物は呼吸も成長もゆっくりしている。寿命は違うのだが不思議なことに、1グラムあたりの体重を軸とすれば、ゾウもネズミも一生涯に食べる分量は同じなのだと言う。更にハツカネズミの心臓は一分間に600回打つが、象は毎分30回、けれども、一生の間に心臓が打つ回数はゾウもネズミも変わらず、どちらも15億回であるそうだ。したれば、それぞれの動物はそれぞれの時間の間に生きており、絵本の中でも「ネズミは早く死んで可愛そうだなってことはないんじゃないか」と問いかけていている。

私自身はと言えば、昭和48年の誕生日に生まれゼロ歳となり、幼少から地元で育ち、青年期は県外や海外などで過ごし、就職と結婚の後に子供

も生まれ、幾つかの病気も経て51歳となった。こうした時間軸は、古代ギリシア語の言葉で「クロノス」と表現され、過去から未来へと一定の速度と方向で流れる連続した時間のことである。一般的に、時間とは時計が刻む共通の速度で永遠に流れ続ける、と人は信じている。だが、それとは対照的に「カイロス」という、質的あるいは主観的な時間や瞬間を表す言葉がある。20年程前、NHKで『その時歴史は動いた』というテレビ番組があった。歴史の分岐点となった「その時」に焦点を当て、そこに至る背景や当事者の物語を描いたシリーズであったが、そのカイロスの時は世界を一変させる影響力を持ったのであった。私の51年という年月が、人生を振り返り「あつという間に過ぎてしまったな」と錯覚するような時間軸もある。そのあつという間にも、過去の宿命的な出遇いや別れ、私を突き動かした願望や諸々の失敗や、多元的な業

縁が凝縮されている。また、大切な家族を亡くし、繰り返しては心の中で対話を続ける方もあるように、時間の尺度は多岐に広がりを持っている。

私達の煩惱では「健康で長生きして死ぬ時は苦しまずに死にたい」と、命の価値を寿命の長さや人生の内容で損得計算ばかりしている。これでは、朝に起きては飯を食い排便し、風呂に入りそして寝て、それなりに忙しいし頑張りながら、病気を避けようとも人生のゴールは死なので、まだ



「夏の思い出」徳風ほし組 長谷成桜

死にたくはないと日々過ごす。人生の中身に付加価値を足そうと、自己の都合を最優先しつつ、我慢して勉強したり、家族の為に懸命に仕事や家事をしたり、またお金の勘定も必須だ。趣味に没頭する事も楽しいが、実際には暇や虚しさという不安を埋め合わせるようと抗う姿でもあろう。折角だから美味しい物を食べようとグルメを求め、また思い出を残そうと懸命にスマホで写真を撮ったりもする。だけれども「一体何の為に生きているのか」問われれば、ひどく曖昧な答えしか浮かばないのではないだろうか。思い通りにならない人生を、しかも意味もわからず苦悩し続ける、それが彼岸に対する此岸つまり「娑婆」なのだと、お釈迦様が見抜いた私達の現実だ。娑婆の原語はサンスクリット語で「サハー」、苦しみを耐え忍ぶ場所という意味であった。

通夜と葬儀の後、勤められる七日七日の法要では、遺族

仏典マンガ

絵：小川ゆきえ

仏さまのおしえ

出典は『パンチャントラ』 インドの説話集、世界最古の物語集です。



毎朝7時から朝の勤行「おあさじ」がございます。どなたも気軽に参詣ください。

の方々が死の事実を受け止めきれず「本当に死んでしまったという感覚がない。まだそばに居るような気がする」と言われたり、また「今まで当たり前にしていた一緒にいた時間が、実は当たり前でなかった」という台詞をお聞きする。仏道では、先に亡くなった人の死に依って、故人の死を縁として教えられる私があり、その私が一期一会、言い替えば「十劫をへた今」に目覚めることがある。普通に過ごした昨日や今日が、明日も当たり前にあると盲信しているこの一日が、単に24時間というのでなく、末期ガンで命を終えた故人が泣きながらあの日、「どうしても生きていたい」と心底願った究極の一日でもあるのだ。この一度きりの尊い人生を丁寧に、そして自分らしく生きるとはどういうことなのか、秋の彼岸の法話を共に聞きながら、自身の心に尋ねてみようと思う。

「文章 若院」

若院の伝道揭示板

・ 本当の宝物
何気ない日常と
共にいる人

◆秋の彼岸

お彼岸の時節には、大切な家族など故人の死を縁として、今いちど共に参りいたしましょう。

真宗門徒のお彼岸とは、こちら岸である此岸での生活のただなかで、我が身の現状や生活の中の問題を通して仏法を聞き開いて、浄土の諸仏となられた先人の願いを確かめる仏事です。

彼岸の入りは9月20日、お中日(秋分の日)は23日、彼岸明けは26日となります。



◆講師紹介



佐野明弘師

加賀市光闡坊住持、京都の大谷専修学院長。もと禪宗で厳しい修行により悟りの世界を目指したが、縁あって念仏者であった北陸の真宗僧侶との出遇いをして転派する。

長らく仏道の方向性に迷い続けた若院にとって、何度も北陸に身を運び、教えを乞うてきた先輩です。

人生を常に丁寧に見つめつつ、出逢った人々と共に念仏の教えに向き合っておられる先生です。

◆娑婆の縁 尽きて

間瀬	稔之	84	中山町	7	25
上脇	武留	90	刈谷市		25
寺西	章司	78	刈谷市	8	1
岸岡	三千雄	92	刈谷市		2
糸	武	83	山町		5
隅田	尚孝	75	中山町		5
西堀	一子	91	新富		11
古林	正勝	85	山町		23

◆お取越のご案内

真宗門徒にとつて最も大切な報恩講、その家庭版が「お取越」です。

本年度は、若院が主にお取越のお勤めに参ります。10月中旬より戸別に順次、ご案内いたします。

◆報恩講

■11月21日(金) 18時

法話 北島栄誠師(長岡市)

法話後には簡素な懇親会を予定しています。

■11月22日(土) 8時・10時

法話 北島栄誠師

■11月23日(日) 8時・10時

法話 大城史雄師(福岡県)

お彼岸前とはいえ、温暖化による残暑の日々が続いています。また新型コロナウイルス「ニンバス」株も流行の兆しがあるようです。

熱中症や日々の体調に気をつけて、ご自愛いただきお過ごしください。



秋のお彼岸には、テレビやスマホを離れ、本堂で教えを聞いて命を見つめましょう。